

# 岡本充弘他編『歴史を射つ』（御茶の水書房、2015）書評会

小田中 直樹（2015年10月24日、東洋大学）

本書は、2008年から2014年にかけて、岡本充弘が中心となって東洋大学人間科学総合研究所が組織した研究プロジェクトの産物であり、具体的には同プロジェクトで内外の歴史学者を中心とする研究者たちがおこなったトークを加除・修正・翻訳のうえ活字化した論文をまとめたものである。プロジェクトのテーマたる「歴史のトランスナショナル化とその問題点」および「トランスナショナル・カルチュラルヒストリーの今後」の壮大さと、岡本の人的ネットワークの広大さを反映して、多種多様かつ稀有壮大な論文が集められている。したがって「お買い得」な一冊であるが、その一方で「これを書評せよ」といわれると困るというのも正直なところである。

以上の点を考慮し、また岡本からも「好きなことを言ってよい」というフリーハンドを与えられた（と、彼からの依頼の文章を勝手に解釈している）ため、以下では、(1)書評会に列席していない海外の研究者の寄稿からなる第一部については、まとめて、共通する論点を抽出し、それについて論評する、(2)執筆者が列席している可能性が高い日本の研究者の寄稿からなる第二部については、評者の能力の範囲内で極力個別にとりあげて論評する、(3)歴史学のあり方について私見すなわち「好きなこと」を言う、という手順を踏んで論を進め、書評の責めをふたぐことにしたい。

## 1.第一部を読む：ポモのインパクトと、その受容消化プロセス

1

あ・の・ヘイドン・ホワイトの寄稿から始まる第一部は、海外の研究者の寄稿からなるが、それらを通底しているのはポスト・モダニズム（ポモ）のインパクトと、それをいかに対応・吸収・消化するべきかという問題に対する回答の意思である。

ポモが歴史学に与えたインパクトについては、ホワイトが2点に要約している（p.13）。第1に、歴史学者が提示する「歴史的な過去」は、過去の事実を忠実になぞったものではなく、過去の出来事のなかから一部を選出・集約・配列・構築するという歴史学者の営みの産物である。歴史学の構築主義的な理解ということになるだろうか。第2に、選出の基準は、特定集団の長期的な自己形成というプロセスに関連するか否か、すなわち集団的アイデンティティの形成にとって有意味か否かにおかれる。歴史学は「アイデンティティの政治」の一環であるということになるだろうか。

本書第一部所収の諸論考は、基本的に、これら二つのテーマに即して記されているといつてよい。

ピーター・バークは、歴史学のスタイルを、歴史学者と研究対象の距離を基準として「内輪型／関わり型」と「よそ者型／切り離し型」という2つのスタンスに区別する。ペニー・コーフィールドは、ポモを批判しつつ、「大きな歴史」あるいは「大きな見取り図」あるいは「歴史の長期的枠組み」（pp.170-1, 182）を提示するべく歴史学者が協働することの必要性を強調する。

シュテファン・バーガー&ビル・ニーヴンは、記憶の理論をもちいてナショナル・ヒストリーという「国民というアイデンティティを構築することに貢献する歴史研究」を超克することをめざしたはずの歴史学者の営為が「記憶理論をもちいたナショナル・アイデンティティの構築」に容易に回収されていることに警笛を鳴らす。イム・ジヒョンは、日本と朝鮮（韓国）の史学史をたどりつつ、西洋中心主義的ナショナル・ヒストリーの強さを

再確認したうえで、グローバル・ヒストリーの導入によって「アイデンティティのスケール・ゲーム」(©小田中直樹)に臨むべくことを説く。エドワード・ワンもまた、グローバル・ヒストリーに期待する(でも、なぜ?)。

このほか、カレ・ピヒライネンはポモ批判に対する反批判を試み、ロバート・ローゼンストーンは映画と歴史学の関係を論じるが、前者は「ホワイトは正しいから正しい」という同義反復にすぎず、後者からは『レズ』すげえ、ウォーレン・ベイティ大好き」というメッセージしか感得しえなかった……のは、これは、ぼくの力不足のなせる業である。

これら論考を読んで感じるのは、

- ①批判理論としてのポモは強力である。
  - ②ポモのアーギュメントのかなりの部分は日本の歴史学界においても共通了解となった。
  - ③ポモは、科学としての歴史学の理論的・方法論的な基礎としては不十分である。
- という3点である。

第1の点については、ポモというよりはポスト・コロニアリズム(ポスコロ)の十全なる咀嚼のうえに書かれたイムの論考が示唆的である。日本オリエンタリズムの産物としての「日・東・西」、「赤いオリエンタリズム」としてのマルクス主義的發展段階論、柳宗悦の朝鮮美術理解のジェンダー・バイアス、「世界史」の産出は「自国史」に先立つ……といった指摘が綺羅星のごとく提示される彼の文章は(彼の旧稿と重複する部分が少なくないとはいえ)わたしたちの常識的な理解を一新させる力にあふれ、本書第一部の白眉をなす。

第2の点については、ホワイトが指摘した2点は、とりわけ従軍慰安婦論争の不毛かつ多角的にして多面的な議論を経て、いまや学部学生でも踏まえておかなければならないお行儀となった。歴史学者は、他の学問領域の専門家と同じく、あるいは彼らにも増して、自己反省的(リフレクシヴ)でなければならない。それは、歴史学が科学とフィクションのはざまにあるという特性と、レオポルド・ランケによって「国家有用」の「科学」という矛盾を孕んだ存在として制度化されたという来歴のゆえである。

第3の点については、ポモには、科学は科学者「たち」によって営まれる集団的な営為であるという観点が弱いという欠点がある。この欠点がもっともあらわに表現されているのは、本書第一部のなかでもっとも「ポモ的な」論考、すなわちピヒライネンのものである。彼は、歴史学者がポモを超克するカギ概念として提示する「経験」を批判するに際して、歴史学の客体は複数形で考えるのに対し、歴史学の主体は単数形で考えるという非対称的なスタンスを崩さない。しかし、科学は複数形の主体によってなされる集団的な営為だし、また、そうでなければならないという観点は、科学社会学が明らかにした重要な成果ではなかったか。歴史学が科学であるならば、また科学であろうとすれば、その主体は複数形でかかれなければならない。単数形の主体によってなされる営為は、アートであって、科学ではない。もちろん歴史学はアートであるという立場もあるだろう。ただし、その場合は、公金の投入根拠はなにかとか、ピアレビューをはじめとする科学の諸作法を持ち込んでよいのかとかいった難問が待ち受けていることを忘れてはならない。

## 2.第二部を読む：史学史的アプローチと、歴史叙述分析

日本人研究者の手になる論考からなる第二部であるが、強引にまとめると、それらは、史学史的アプローチをもちいて、歴史学方法論・歴史「学」哲学・歴史理論の今後を展望するものと、歴史叙述の可能性を探るものに大別できる。ただし、後者のうち北原敦のネオレアリズモ論は、ぼくに理解する力がないのでパスしたい。ローゼンストーンに続いて映画分析は、ぼくにとって鬼門であり、どうにも相性が悪くて困るが、これはぼくの頭が

固いせいだろう。また、池尻良平の歴史教育論は、どうも収まりが悪いので、これまたパスしたい。歴史教育については、膨大な研究蓄積がある（らしい）ので、そちらで議論されるべきだろう。すまん。

史学史的なアプローチをもちいて今後の歴史学を展望する諸論考からいくとするか。

鹿島は、従軍慰安婦論争が（一見）終焉した 2004 年からの十年間に日本人研究者によって刊行された「歴史基礎論」とでも呼ぶべき領域に関する論考 6 本を対象として、それらにおいて展開されたアーギュメントからなんらかに理論的示唆を導出することをめざしたものである。そして、歴史叙述すなわち「歴史の物語り」(historical narrative) の理論的に考察を進めることと、広義の歴史学における「交流」や「対話」のモメントを重視すべきことを提唱する。

ぼくは、個々の論考や、それらが依拠する諸理論に対する鹿島の評価については若干の異議がある（たとえばカオス・複雑系・共依存理論なんぞ、もうちょっとしたら「歴史」の忘却の淵に沈むだろうと予言しておこう）が、彼の 2 つの提案、とりわけ後者については、全面的に同意する。これに対して前者、すなわち歴史叙述の理論的考察は、実践的な（プラクティカルな）立場から考えると、存外に困難である。歴史認識とか歴史解釈とか、そのへんは実践の次元でも「そこそこ行ける」ような気がするのとは、まったく対照的である。どうすればよいのか？

歴史基礎論の史学史的考察について、鹿島が哲学の側から取組んだのに対して、長谷川は歴史学の側から取組んでいる。長谷川は、史学史を「ランケ史学の物語り風の歴史叙述の政治史学」、「政治的現象を理解する前提となる社会経済的位相を明らかにしてそれと政治的領域を結びつける因果関係を求める」経済史学、「ミクロな個人レベルでの日常的実践を理解するためのコンテクストの発見を追求する」文化史学という 3 つの時期に区分したうえで、経済史学から文化自覚に移行する過渡期な存在として社会史学を位置づける (p.248)。そのうえで、社会史学に対する言語論的転回のインパクトを、柴田三千雄、遅塚忠躬、二宮宏之という「フランス史三巨頭」(©小田中直樹) に即して測定し、「日本における言語論的転回の受容は、物語り論に収斂していった」(p.257) と結論したうえで、2005 年以降の「歴史学再生への息吹」(p.258) に言及して論をとじている。

社会史学を過渡的な存在と位置づける長谷川の史学史理解は、大きな反響を呼ぶべきである……が、ぼくは、そんなこと考えたことがないので「Mmm」であり、評価は控えたい。これに対して個別の論点については、フランス史学屋としては一言いわねばなるまい。柴田については、長谷川は、1980 年代末に言語論的転回に到達したと評価しているが、むしろ、すでに 1960 年代後半に、政治的範疇としてのアリストクラシーの革命、政治社会経済的範疇としてのブルジョワジーの革命、社会経済的範疇としての民衆・農民の革命という「その次元を異にする」運動の複合体としてフランス革命を捉えるべきことを主張したことが重視されなければならない。遅塚については、長谷川は、遅塚のアーギュメントの独自性の中核を「事実についての三階層モデル」(p.254) に求めるが、そうではない。遅塚の真骨頂は、むしろ、エマヌエル・カントに拠りつつ真実 (truth) と事実 (fact) を峻別し、共有されたルールにもとづいて後者の確からしさを向上させるゲームとして歴史学（さらには科学一般）を捉えた点にある。

内田力は、本書所収のイムとワンの論考を分析しつつ、日本歴史学史における社会史学のなかに「言説としての世界史」という「言説の囚人が牢獄を改変しようと試みた端緒」をみてとろうとする。おもに論じられるのは「グローバルな民衆文化の探究へと向かう可能性を胚胎していた」(p.367) 網野善彦の業績である。「歴史学」の概念そのものの拡大を狙う内田の意図には、おおきく共感する。「歴史研究としての世界史」と同じこもる歴史愛

好者（歴史学コミュニティ）の内輪話としての史学史は、もう飽きた。でも、ぼくらは「言説のとしての世界史」にコミットするリソースをもっているのだろうか？

長野壮一は、1970年代日本の西洋史学界に存在した「社会運動史」グループ、とりわけ喜安朗のアーギュメントを分析し、そこに新たな「主体性と全体性」を構築しようとする努力をみてとる。その背景には、歴史学が「危機」にあるという長野の問題意識がある。このような問題設定をする際に重要なのは「いま（あるいは当時）はいかなる時代なのか」という現状把握である。時代に応じて、求められる「主体性と全体性」は変化し、それらを追求する歴史屋の意識も変化するからだ。長野はそれを「大衆消費社会」と定義するが、これは適切である。そのうえで、大衆消費社会における主体性の基礎は「誇り」（二宮宏之、喜安）に求められるとされる。これは「矜持」（工藤光一）あるいは「人格承認欲求」（大門正克）につながるスタンスといってよいが、人間の意識の根底にこれら感情があるか否かはいかに測定されうるのだろうか？

つづいて歴史叙述に関する諸論考である。

平井雄一郎は、歴史叙述は「じつは」結果から原因を跡付けならぬ後付ける営為であり、したがって正統化・正当化の色彩を色濃く帯びていると喝破したうえで、このスムーズな成功物語から外れる「ハズレ値」としての事象はいかに処理されうるかという問題を立てる。そして、この問題を、天狗党事件について渋沢栄一が語った「憐れむべき」という言葉に着目した幸田露伴の記述を手掛かりとして探究する。そして、歴史記述においてハズレ値は隠蔽されるのが常であるというみもふたもない結論と、「あらたな必然の物語」（p.287）が紡がれる可能性に対するかすかな希望に至る。平井の論考は、ミハイル・バフチンやカルロ・ギンズブルクのテキスト論を想起させるが、それが具体的な事実にもとづいて展開されているだけに、説得的であり、刺激的である。けだし第二部の白眉というべきだろう。

渡辺賢一郎は、少女マンガの語りのなかに、一人称の語り、三人称の語り、一人称の語りの切り替えなど、多様な形式を見出し、それら各々の機能・意義を確定するとともに、歴史叙述への応用可能性を探る。周知のとおり、日本のマンガは、叙述や表現に関する理論において、きわめて高い水準に達している。それゆえ、マンガにおける語りを歴史学者が理論的に分析することは有意味・有意義である。実際、本論考における渡辺の指摘は「誰の物語なのか」というキーワードを経由して、歴史叙述をめぐる歴史学界の議論にはっきりと接続している。問題は「それでは、かくして得られた知見をいかに利用するか」という実践的な次元にある。

### 3.私見：「アイデンティティのスケール・ゲーム」から「インタレストの次元における共感（sympathy）の実践」へ？

だいぶ疲れてきたが、最後に、本書で取扱われてきた問題系に関するぼくの私見を述べておかなければならないだろう。それは、一言でいえば「アイデンティティのスケール・ゲーム」が流行っているようだが、それはそろそろやめて「インタレストの次元における共感という実践」について考えてみないか、ということになる。

雑談になるが、8月下旬に国際歴史学会（中国・済南）があり、最後のセッション「歴史と倫理」のコメンテータを担当することになったので、初めて中国に出向き、初めて同学会に参加した。中国の印象は（はじめて外国を訪問する際には当然のことながら、色々なことを感じさせられたが）措いておき、学会の印象は「アクチュアルで社会的な問題に

対する関心が高い」ということだった。もちろん純粋学術的な議論は、個別の学会があるから、そちらでやられているのかもしれない。それでも、歴史教育・記憶と歴史・歴史博物館学・史学史といったセッションが並んでいるのは、たとえば日本西洋史学会におけるこれら分野の冷遇ぶりを想起すると、壯観である。

さて「歴史と倫理」は、本書にも寄稿しているイムが組織したもので、これまた本書寄稿者バーガーもコメンテータとして参加し、さらに会場には本書共編者の岡本がニコニコしながら座っている（が、もっとも印象的だったのは最前列右端から、ユルゲン・コッカが夫人連れで睨みをきかせていた姿だった）という本書にピッタリのセッションだったが、そこでイムが提示したキーワードは「記憶の体制（メモリー・レジーム）」だった。これは現在の東アジアにおける歴史と記憶をとりまく知的状況を表現するべく彼がひねり出した造語であるが、歴史学のアクチュアルな社会的機能の存在を示して余りある。

たしかに、ポモが教えてくれたのは、歴史屋稼業は社会的でアクチュアルな職業だということではなかったか。もっとも、日本では、ポモは、1980年代、脱社会的で浮世離れた知的遊戯として輸入されたから、その本来のメッセージとパワーが十分なかたちで理解され定着したとは、残念ながら言いがたいが。

そんなわけで、問題は、歴史学が社会のアクチュアルな問題にコミットする際に（というより、好むと好まざるとにかかわらずコミットせざるをえないことを念頭において）どこから始めるかにある。

ぼくがみるところ、現在のトレンドは、この出発点を「アイデンティティのスケール・ゲーム」においている。すなわち、歴史をとりまく社会的でアクチュアルな問題の最大のもはナショナリズムが惹起する諸問題である。ナショナリズムは「国民」というアイデンティティと相互に産出しあう関係にある。したがって、ぼくらはアイデンティティの次元に関するリサーチ・議論・実践を重視しなければならない。そして、国民がなんらかの境界（ボーダー）をもち、したがって一定のスケールを有する集団であるからには、国民と密接に関わるナショナリズムが問題を孕んでいるのであれば、ぼくらはアイデンティティのスケールを変更し、「正しい」スケールを探求するという営み、すなわちスケール・ゲームに参加するべきである——といったところだろうか。

たとえば、ぼくのみるところ、最近流行のグローバル・ヒストリーも、そのかなりの部分は、ナショナリズムと国民、さらにはそれらと密接に関わる国民国家やナショナル・ヒストリーといった諸事象に対する批判的な眼差しを有し、場合によってはそこから生じているといつてよい。

こんなことを書くと、それじゃもうひとつの流行たる文化史学（new cultural history）はどうなんだ、という声が聞こえてきそうだが、一知半解のままに話を進めると、文化史学だってアイデンティティの次元で話をするのが好きなんじゃなかろうか……違うか。ま、このあたりは長谷川くんに任せたい。

ぼくがいたいのは、とにかくアイデンティティ論はアブナイということだ。この辺については2013年の日本西洋史学会・全体シンポジウム（京都）など色々な機会にしゃべったし、かなりの部分については来年出る予定の論文集（角松生史他編、日本評論社）に寄稿しているのでご覧いただければよいが、要するに、アイデンティティは境界を設定して「内」と「外」を区別・分類する、それだけではなく「内」と「外」を序列化しがちであり、アブナイ。そして、こんな機能を持つのは独り「国民」というアイデンティティだけではない、したがって「国民以外のスケールを採用すればよい、それじゃなにがベターだろうか、たとえばグローブとかいいんじゃないか？」というスケール・ゲームは、無意味であり、現実から目をさらさせるだけ余計に危険である。ナショナルなものだけを目の敵に

するのは、そろそろ終わりにしないか。

それでは、社会のアクチュアルな問題と切り結ぶに際して、歴史屋はどこから出発すればよいのか。これについては諸説ありうるだろうが、ぼくは、キーワードは、インタレスト、共感（シンパシー）、そして実践（プラクシス）の三つだと考えている。この辺については、2015年度の日本西洋史学会・小シンポジウム（富山）や先述した国際歴史学会でアイデアを披露したが、来年4月に開催予定の『国民を書く』シリーズ書評セミナー（韓国・ソウル）でちゃんと話す予定だ……が、予定は未定である。ちなみにこのセミナー、例によって、イムが主催し、『国民を書く』シリーズの編者バーガーがメイントーカーとなり、長谷川くんが参加予定という、これまた本書にピッタリの企画である

まずインタレストであるが、この語は関心あるいは利害と邦訳されるが、ここでは、その両方の意味で用いている。「利害」つまり経済的な次元で、他者に対する「関心」について議論しようということだ。なぜ経済的な次元かというと、アイデンティティの次元と異なり、妥協が比較的容易に可能だからである。妥協というよりも調整・すりあわせと呼ぶべきかもしれないが、後者では「1か0か、中か外か」というデジタルな議論になるのに対して、前者では「ま、今回は0.4でいいか、次よろしく」というアナログな暫定的結論に至ることが可能であり、普通である。

次に共感であるが、ここでは、アダム・スミスが用いた意味で使用している。すなわち他者の立場に想像上立ってみて、それから意思決定する、ということだ。もちろん、どんな場合でも共感が可能であるとはいえないだろう。重要なのは、共感可能な空間をいかに拡大するかである。

そして実践であるが、要するに、歴史愛好者コミュニティのなかに閉塞蟄居して安穩とすごしうる時代は終わったということだ。せめてもうちょっと広い公共空間をオーディエンスとして設定し、そこに届く言葉を創造し、歴史を語る場を創出するべく実践を重ねないと、歴史学には不要の烙印を押されるだろう。歴史に関わる言説空間は「歴史戦」とかいった勇ましい言葉を書連ねる（悪い意味での）素人に占領されるだろう。それでいいのか、ぼくら？

だいたいが話が逸れてしまったように聞こえるかもしれないが、ぼくとしては「まったく逸れていない」と偉そうに断言しておこう。まったくもって、他人事ではないのだ。